

## 石巻通信第5号（08年5月25日）

### ☆ 榎本武揚のこと

高成田享

私も編著者に名を連ねた『榎本武揚・近代日本の万能人』が先頃、藤原書店から出版された。森谷正規氏が「平和の戦いで勝つ“国利民福”の思想」と題して毎日新聞の書評欄（5月18日）で、また橋本五郎氏が「真の痩せ我慢を考える」と題して読売新聞のコラム「五郎ワールド」（5月17日）で、それぞれ取り上げたので、お気づきになったかもしれない。何で「さかな記者」が榎本武揚か、という疑問に答えながら、武揚との出会いについて話したい。

何年か前に函館を旅した折りに、函館市の旧公会堂の職員で函館の「語り部」である塩谷忍さんと知り合いになった。その塩谷さんが紹介してくれたのが「箱館戦争」を率いた榎本武揚のひ孫にあたる榎本隆充さんで、今回出版された本の共編者だ。東京に住む隆充さんは、武揚の子孫ということで、函館を訪ねる機会があり、語り部の塩谷さんとも親しくなっていた。東京で、隆充さんの話を聞いているうちに、武揚という人物に興味を持った。

明治元年（1868年）、江戸幕府の海軍を率いて、函館に逃げた武揚は「蝦夷共和国」をつくり、旧幕臣による北海道開拓をめざすが、明治政府に反乱軍とされ、翌1869年の五稜郭の戦いで敗北、武揚は降伏する。ここまでは私も知っていたが、江戸に送られた武揚が2年半の獄中生活を送り放免されたあとの人生については、明治政府に仕えて出世したので、福沢諭吉から「痩せ我慢の説」で、痩せ我慢が足りぬと批判されたことくらいしか知らなかった。

隆充さんから聞いたのは、処刑されるのを覚悟していた獄中の武揚が、欧州留学で学んだ

近代日本の万能人  
榎本武揚  
1836-1908  
榎本隆充・高成田享 編

加藤寛 山本明夫 速水融 佐藤優 童門冬二  
白井隆一郎 下斗米伸夫 木村汎 山本厚子 松田藤四郎  
中山一 榎本静恵 吉岡学 小美濃清明 佐藤智雄 森山行輝  
中村喜和 岩下百典 近江幸雄 山口英爾 進藤咲子 奥田浩弥 小泉和  
芝哲夫 酒井シヅ 福本龍 寺崎修 関口昭平 谷田一 釣平一

没100年記念出版  
最先端の科学知識と広大な世界観を兼ね備え、  
世界に通用する稀有な官僚として外交・内政の最前線で日本近代化に貢献しながら、  
幕末維新史において軽視されてきた男。

**近代日本随一の国際人！**

藤原書店 定価 本体 3300円+税

科学知識をあとに残そうと書物を書き、そのときの心境を「獄中詩」というノートに記していたという物語だ。その獄中詩のなかに以下の七言絶句があった。

七十老親鬢似銀  
荊妻臥病守清貧  
君恩未報逢今日  
孤負忠孝兩全人

母親は老いて病に伏し、私は徳川幕府から（留学の）恩を受けたのに、未だその恩に報いていない、といった武揚の嘆きが書かれている。隆充さんはこの詩のコピーを見せながら、「ここをよく見てください、ルビがふってあるでしょう」と言って、「君恩」というところを指さした。「君恩」のよこにはルビのように「国為」という漢字が書かれていた。「武揚にとって、将軍への恩義と国の為という意識は同じだったのでしょ」と説明した。

徳川家への忠義から無謀ともいえる戦いを指揮し、敗れたうえに生きながらえた武揚にとって、もはや徳川幕府も明治政府もなかつたろう。しかし、西欧列強の欲望が渦巻く荒海に、日本という「国家」が放り出され漂流しているなかでは、世を捨てるどころか自分の得た知識をもって「国」に報いたいという意識が強まったのだらう。それが戊辰戦争で「逆賊」として死んでいった仲間たちへの鎮魂にもなると考えたのではないか。このルビを見て、私にとって武揚という人物が大きな存在感を持つようになった。『榎本武揚』の序でも、私はこう書いた。

幕臣から明治政府の要人として生きた榎本を貫いたのは、血眼になって領土の獲得にしのぎをけずる西欧列強のありように触発された強烈な「国益意識」であつたらう。

隆充さんから、2008年が武揚の没後100年になると聞いたのは昨年のことだつた。多くの人々の意識では箱館戦争で終わっている武揚を再評価できないか、相談した藤原書店社長の藤原良雄さんの発案で、武揚研究者らによる勉強会を進めるうちに、本作りが固まっていった。

いまあらためて武揚という人物を考えてみると、幕末から明治という時期に、日本という国家をどう構築していくかという構想を抱いていた戦略家のひとりであり、その根底に自分は技術者であるという意識があつたという意味では、日本構築のエンジニアであつた。そして、その構想の基盤が「富国強兵」ではなく「国利民福」であつたということは、思想家としては皆無とはいえないかもしれないが、政権の中にいた時期も長く、明治天皇の話し相手でもあつたという場所にいた人間としては特異な存在であつた。科学技術への興

味から軍事技術も重視した武揚が、欧州列強の帝国主義よりも近代資本主義に着目したのは、欧州や露西亜で暮らした経験から、国家の基礎が軍事よりも産業にあると確信したからだろう。

日本が次第に富国強兵の道を歩むなかで、人口増による圧力を大陸に向けようとせず、南方諸島やメキシコへの移民で解決しようとした発想は、太平洋国家をめざした「南進論」の先駆ということになるだろう。『榎本武揚』のなかには、こうした論点が散りばめられているので、今後の武揚研究の入門書にはなったと思う。

また、没後 100 年を記念したシンポジウム「今、なぜ榎本武揚か」が 7 月 11 日（金）夜に日本プレスセンターで開かれ、私もその司会をすることになっている。加藤寛、小倉和夫、ウィリアム・スティール、佐藤優、高橋雄造の各氏がパネリストとして登壇する予定で、武揚の再評価につながる面白い議論が飛び出すものと期待している。ご興味のある方は、シンポ事務局の藤原書店（03-5272-0301）まで。

☆

☆

ところで、石巻に赴任するときに、隆充さんから「武揚と石巻は関係があるのです」という話を聞いた。幕府海軍の旗艦で当時の最新鋭艦「開陽丸」で品川沖を脱出した武揚は箱館に向かう途中、石巻に寄り、陸路で転戦してきた土方歳三らと合流、その後、宮古経由の航路で箱館に向かったというのだ。

たしかに赴任してみると、武揚が石巻では「有名人」であることがすぐにわかった。石巻の折浜という浜辺に着いた武揚は、仙台藩の斡旋で、石巻の豪商、毛利屋利兵衛の屋敷内にあった住居に 1 カ月半も滞在し、そこで榎本艦隊の艦船を修理したり、土方らと作戦を練ったりする一方、仙台藩には新政府に対して決起するよう促していた。しかし、仙台藩内では主戦論より恭順論が強まり、官軍が迫るなかで武揚らは石巻を去った。そのとき、土方は決起しない仙台藩への怒りから毛利邸の床柱に刀で斬りつけた。その刀傷がいまも柱に残っている。もし、仙台藩が武揚に同調して決起していれば、石巻は官軍との戦争に巻き込まれ火の海になっていたし、武揚も討ち死にしていた。

そんな歴史を語る人たちが石巻にはたくさんいるのだ。武揚が滞在した邸宅は、最近まで残っていたが、老朽化が進んだことから壊してしまったという。刀傷の柱はいまの持ち主が切り取って残しているという。市のある課長とそんな話をしていたら、「その家は私のうちでした」といって、CDに残した「旧毛利邸」の写真を届けてくれた。狭い町である。没後 100 年を記念して今年 7 月には、大阪市所有の帆船「あこがれ」が開陽丸の航跡を追

って東京→石巻→宮古→函館を航海することになっている。石巻には隆充さんらが来て、講演会を開くことになっている。私も「あこがれ」に同乗して、あらためて武揚の心情を考えてみようと思っている。

☆

☆

写真は、榎本武揚が石巻で滞在した旧毛利邸で、壊す直前に現在の持ち主であるの佐藤和夫氏から提供を受けた。



また、前号で、沿岸の調査捕鯨船に乗ると書いたが、その同乗記を宮城版に書いたので、それを転載する。「代表取材」ということで、記事と写真は各社に素材という形で提供したこともあり、記者個人としての主観は極力排除してある。

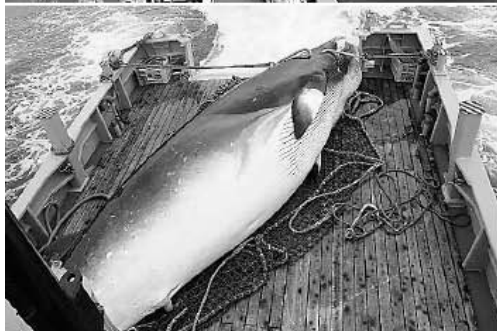


# 浮上の一瞬 もりを撃つ

## 三陸沖調査捕鯨船に同乗

4月から始まった三陸沖の調査捕鯨は、好天が続くこの時期が「最盛期」。石巻市の鮎川港から連日のように船が出て、今日25日までに60頭のミンククジラを捕獲する予定だ。調査捕鯨の実態はどんなものなのか、捕鯨船に同乗した。

(代表取材・高成田享)



①砲撃手がもりを撃った瞬間②捕獲され、捕鯨船に引き揚げられたクジラ—いずれも8日、仙台湾沖で

ドーンと乾いた音をさせながらロープを付けたもりが、真ん前に浮上したミンククジラに放たれた。それまでけたたましく動いていたエンジンが静かになり、砲煙の立ちこめる船首付近にいた砲撃手らが船の下をのぞきこむと、海

面がうつすらと赤く染まってくる。8日午後0時28分、2時間にもわたる長い追跡の後現れたこの日3頭目のクジラは、体長が7メートルを超す大きなオスだった。クジラが海面に浮かぶのは

## インサイド宮城

## 捕獲・運搬、4隻チームワーク

辛抱強く追ううちに、クジラの動きがしたいに鈍くなる。「もつと右だ」「もう少し」「よし、上がるぞ」と、トップバレルと呼ぶ探索マストから砲撃手に指示を出していた甲板長が「よし、撃て」と最後の指示を出した。

この日の調査地域になった仙台湾に向けて、第31純友丸(32ト、千葉県和田港)が鮎川港を出発したのは午前5時半だった。午前6時40分、最初に発見したクジラは体長5メートル、からだ比較的に小さかったせいから、4発目でやっと当てた。約50分かかった。沿岸捕鯨の捕鯨船は小さく、1頭捕獲することに鮎川まで帰港しなければならない。そこで、捕鯨に加わっていた第28大勝丸(鮎川港)が運んでいった。船脚の速い純友丸が残ったほうが有利という判断からだ。

2頭目は逆に鮎川港の第75幸栄丸が追っていたクジラを、応援でかけた純友丸が先に捕獲した。このときも、幸栄丸がクジラの運搬役に回った。今回の三陸沖での同乗東京さま、こりまか日記